

山口 晃

西洋追従の近代化に抗して
西洋画材を日本人としてこなす道



油画科を選んだ理由

大学院は修士だけでしたので、二年で出ています。その後、修士が終わると同時に助手になって三年おったものですから、あの敷地には都合九年通い続けですね。

高校三年生のころに読んだエッセイに、中村光夫の『移動の時代』というものがありました。それは、文化の内発性というようなことを言っていて、近代化に疑問を呈している内容でしたけれども、それにあてられまして、ああいう西洋追従の近代化はいかなるものかと思うようになりました。

じゃあ、油画科を選ばずに日本画を選ばないようなものなんですけど、そこら辺はなかなか思い至りません。逆に、油彩画が明治期にどっどっど入ってきて、流され、流され、その後来てしまったものを見るに、油画こそあるべき近代化を再現すべき分野で、むしろ現代においてやる意味があるのではないかみたいな気持ちはありました。

西洋画材というのを黒田清輝ではなく高橋由一のように、日本人としてこなすというのですか。日本人がよくないのは、画材を使うのはいいけど、描き方までまねしちゃうんですね。そうすると、せっかく小麦粉が入ってきて、それでパスタばかりつくっているようなもので、小麦粉で麵をつくったら、うどんとか違うものをつくったほうが、日本の文化がより豊かになるのではないか。ですから西洋画材で何とかしてやるうというのでやっておりましたけれども、気持ちとしては、日本画の人以上に、自分は日本に取り込んでおるんだぞという気でおりました。

「古美研」での衝撃

古美研、古美術研究旅行というのがありまして三年生の春、奈良、京都に参りました。

一番衝撃的だったのは、近世以前のものを見たときに、何だ、これは、全部あるじゃないかと。言ってしまうと、西洋の美術が写実を捨てて近代化から現代化したときに培ってきたものというのがほぼ全部あるんですね。インスタレーションみたいなものが当時はやっておりましたけれども、むしろ昔の美術というのはインスタレーションばかりで、仏様の空間というのは建物丸ごとインスタレーションなんですね。どういふ



左：山口晃「邸内見立 洛中洛外圖」
2007 カンヴァスに油彩、水彩、墨 80x130 cm
撮影：宮島徑 ©YAMAGUCHI Akira
Courtesy Mizuma Art Gallery
右：「山口晃 大画面作品集」(青幻舎)

うにお客さまを導いて、どういうふうを意識を変えていくかというのを、千年も前からやっていたんだ、むしろ、西洋近代というのが世界の中で特化したジャンルだという感じを受けました。

また同時期に、東博(東京国立博物館)で大和絵展というのがあったのです。それまではせいぜい浮世絵くらいしか知らなかったようなものが、室町とかそれ以前のもが山のように来ておりますと、浮世絵の取り澄ましたものではない、もうちよつとざっくりした、この人は何がしたいのだろうというようなものが山のように来ておりまして、これもまたしびれるわけですね。パースも全然とれていないのに、何でこんなに格好いいんだというのがあって、かなり衝撃を受けましたね。

楽をしちゃいけない

つくりたいものをつくっているようで、つくっていないですね。

つくりたいものをつくるというのは、それこそ技術が要することで、その技術というのは、学校ではあまり教えてくれない。要は、脳みそに浮かんだものを逐一紙に定着する技術というので言ってみれば、「そんなの、ぱつと花が浮かんだらそれを描けばいいじゃないか」と思いますけれども、それを(後頭部を指さして)ここから出してくる時点で、今まで見てきたものとか、世にあふれている画像のイメージとか、いろいろなものにまみれちゃうんですね。それを普通の人は思いついたものが描けたつもりでいるんですけども、それは多分、ここにあったものの二割にも満たないような、あとの八割はそこらに充滿しているものでできているような、それを出して大体の人は安心してしまっただけですね。そういう作品というのは人様にあまり響かないし、八割は楽をしちゃっている。何とかここにあったものを七割、八割にしていけると、人様が足をとめてくれるんです。一見「おまえのは九割古いものでできていないか」と言われることがあるんですけど、雲と消失点がないという二点以外、そういう古い画像のイメージというのは使わないようにしています。

とにかく、楽をしないとこのさえわかっていけば、現代に溺れているのが、歴史をよく学んでいようが、どっちでも大丈夫と思うのですね。偉そうに言えるとしたらそういうところぐらい。楽をしてはいけないのだからといって、物をいっばい描けばいいということじゃないんですね。筆一つでこの絵と同じイメージ、感覚を起(こ)させることができるんだら、私も一筆で済ませるんですけども、まだそういうことができない



ので仕方なく一々描いているだけのこと、そこに焦点を合わせているだけなんです。いっばい描きたいというのもちよつとありますけれども、別にそれが目的というのではなくて、そこら辺を見極めて、それを逆算して作品に盛り込んであげることには労を惜しんじやだめだと思いません。

やまぐち・あきら

画家。1969年東京生まれ、群馬県桐生市に育つ。2007年上野の森美術館「アートで候。会田誠 山口晃展」、2012年2月銀座メゾンエルメス個展「望郷—TOKIORE(I)MIX」、また同年11月に平等院養林庵書院に襖絵を奉納。五木寛之氏による新聞小説「親鸞」の挿絵を2008年秋より通算2年間担当するなど、幅広い制作活動を展開。近著に『ヘンな日本美術史』(祥伝社)。